

# か も 市史だより

平成24年12月  
No.26

◆編集発行 加茂市幸町2丁目3番5号 加茂市教育委員会内市史編さん室 ☎0256(52)0080 内線480

## ■ 加 茂 市 の 郷 土 人 形 ■



▲ 鯛型 素形と彩色（本頁の写真はいずれも民俗資料館所蔵）



▲ 天神 ねり人形と型

▲ えびす 右から型・土人形・ねり人形

人形は祈りや行事等に用いる人形から発生したといわれ、  
一世代前の古老たちは「人形サマ」と呼んでいました。郷土人形には地方の信仰・行事と結びついた例が各地にあります。加茂市では陣ヶ峰や大原（下興野向）の瓦職人が冬の手内職として瓦土を使って、えびす・大黒や「めでたい」の鯛型などを作り、色は黒地に金粉を吹き付けて仕上げました。天神人形等は、後には顔料に膠を混ぜた泥絵具やエナメルで彩色するようになりました。作り方は手びねり成型に押し付ける方法があります。押し型式は同形のもので短時間に多く作ることが出来ます。松原人形はオガクズに糊を練り込んで作るねり人形が主で、収集家などに人気があり、北越の郷土人形として県外にも知られていました。

伝承では、戊辰戦争の際に会津藩士と接触のあった松原の本間家が、会津武士の手内職のねり人形の技法を伝授されたといわれています。松原人形には、ほかに小さな円台の土塊に和紙を円錐形に巻き付け、ダルマの顔を描き赤く塗った三角ダルマもあります。

（民俗部会 五十嵐 稔）

# 中世加茂の信仰遺物

加茂市内には、四百年以上前に遡る遺跡が多数あります。ここでは、平安時代の末期から戦国時代にかけての遺跡から出土した信仰遺物を紹介します。

## ◆青海神社経塚出土品

青海神社では、経塚が少なくとも二か所（A経塚・B経塚）で見つかっています。経塚とは、釈迦入滅後の末法の世に、経文を後世に伝える

ために土中に埋めたもので、十二世紀に盛んとなります。

A経塚は、宝暦七年（一七五七）に新発田藩主の命で、加茂明神拜殿を再建した折に杉の根元から出土したものです。石櫃の中に紙のお経を入れた経筒等が納められていました。出土品には、銅製経筒及び珠洲陶製壺があり、ほかに刀子などがありました。経筒は、鋳銅製で宝珠を付す被せ蓋が付いています。

筒身には、「倉持宗吉／菅原氏／治承二年六月廿四日」と銘が刻まれていることから、一一七八年に菅原氏によって埋経されたことがわかります。総高二六・五cmを測ります。珠洲四耳壺は、現存高二〇・七cmで口を欠いていることから、経筒の外容器に用いられたものと考えられます。

B経塚は、昭和十五年（一九四〇）に青海神社の境内にある貴船神社の上方の尾根より発見されました。出土品には、銅製経筒及び珠洲焼の甕、和鏡、刀子数本があります。経筒は、銅板製で蓋は被せ蓋です。総高二四・八cmを測ります。和鏡は、

和鏡と経筒（以上は青海神社所蔵）  
秋草双鶴鏡で、直径一〇・九cmを測ります。  
本経塚は、市内の西光寺経塚、見附市小栗山不動院経塚、新潟市西蒲区菖蒲塚古墳経塚、阿賀野市横峯経塚、新発田市叶浦経塚等とともに平安末期～鎌倉時代の越後平野の埋経信仰を物語る貴重な資料です。  
なお、本経塚遺物のうち、A経塚の経筒と珠洲壺、B経塚の経筒、秋草双鶴鏡、刀子の五点が昭和三十七



▲ 壺に挿鉢が被された珠洲焼と短刀（西光寺所蔵）



## ◆西光寺経塚出土品

年に新潟県指定文化財（考古資料）になっています。

大正四年（一九一五）に八幡の西光寺裏山から掘り出されたもので、珠洲陶製の叩き壺・挿鉢各一点、短刀三点が出土しました。出土状況は、珠洲挿鉢を珠洲壺の上に被せて埋められており、短刀は三方に配されていました。

本例は、金属製経筒が出土しておらず、墓とも経塚とも判断がつかないのですが、見附市の小栗山不動院経塚の事例から経塚であった可能性が高いものと思われれます。

珠洲挿鉢は、口径三〇・六cm、器高一四・七cmを測る鎌倉初期の一三世紀初頭のもので、

珠洲叩き壺は、器高三八・七cmで挿鉢と同時期のものです。短刀三本は、すべて腐食が著しく、折損していますが、それぞれ二〇cm以上の長さ



さがありません。市内で複数の経塚がみつかったことから、中世の前期に、すでに宗教的環境の中に加茂市があったことがわかります。

◆賢聖寺跡出土品

昭和二十四年（一九四九）に、上黒水集落裏の尾根上（賢聖寺跡）を開墾していたところ、密教法具を納

めた陶器壺がみつかりました。この壺には、密教法具が一括埋納されておりました。内訳は、金銅製の五鈷鈴一・五鈷杵二・花瓶一・六器碗四・六器台皿五、木製の三鈷杵一点の計一四点と多数に上ります。各法具には、植物繊維が付着しており、和紙に包まれて埋納されていたようです。

五鈷鈴は、器高一五・一cmで、五

▲ 賢聖寺跡出土品（黒水西 鶴巻肇氏所蔵） 賢聖寺は2度の移転を経たといわれ、写真は最初の故地から出土した密教法具。

本の下に鈴が付くもので、祈禱時に振って音を出す法具ですが、鈴の中の舌は失われていません。

五鈷杵は、大小があり、大は全長一四・四cm、小は長さ一〇cmを測ります。祈禱時に真ん中の柄を握って使います。

三鈷杵は、使い方としては五鈷杵と同じですが、出土品としては非常に珍しい木製品で、全長一三・二cmを測ります。

垂字形花瓶は、非常に薄いつくりで、わずかに脚端部を欠いています。

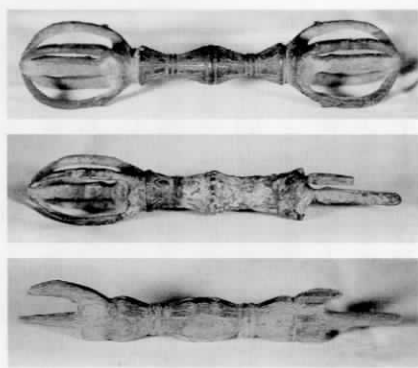
遺存高六・六cmを測ります。六器碗は四点あり、一点はやや口が反り、他は口を肥厚させるタイプです。一点のみ口縁から外面にかけてタール状の染みがついており、油を入れていたことがわかります。

六器台皿は、五点あり、内一点には内面から外面の一部にかけてタールの付着が認められ、右碗と同時に使用されて油がこぼれたものと考えられます。したがってこれら密教法具は、実際に使用されていたことがわかります。

なお、鏡四点に対して、皿は五点です。余った皿には垂字形花瓶を載せていたものと思われる。

各生産年代は、概ね五鈷杵・垂字形花瓶が鎌倉、五鈷杵（大）・六器が一四世紀代、五鈷杵（小）が一五世紀代とばらつきがありますが、最も新しい一五世紀代に埋められたものと考えられます。

なお、長さ八cmほどの木片が一緒に伝わっており、香木である可能性



▲ 上段から五鈷杵（大）・五鈷杵（小）・木製三鈷杵



▲ 石高山城跡出土の銅製火舎（民俗資料館所蔵）

（考古・古代・中世部会 水澤幸一）

があります。容器の壺は、越前陶と考えられ、器高三〇・六cmを測ります。

このような密教法具の一括埋納事例は、越後では上越地域に集中しており、北部域では非常に貴重な例です。

◆石高山城跡出土銅製火舎

口径三・二五cm、器高は脚部込みで二・三cmという非常に小型の火舎が、下大谷集落北方の石高山城跡から出土しています。

脚は獸脚様で、三脚のうち一脚を欠いています。また、うっすらと塗金痕が残っています。

本品は、小型の製品であることから、携帯用の密教法具の一具であると思われる。戦国期のものと考えられますが、山城で何を祈禱したのでしょうか。

# 同木の伝承を持つ仏像

特別の霊力が宿った霊木で仏像を刻むと、仏像の霊力に霊木の霊力が加わるので、霊験はことさらにあらたかになると考えられていました。一本の霊木を余すことなく使おうとし、何体もの仏像を、しかも有名な仏師や僧が刻んだという伝承を生んだのです。「伝承」ですからその点は注意が必要です。

加茂市下高柳の善興寺にある子育て地蔵は、満米上人の作と伝え、田上町羽生田の定福寺の地蔵菩薩と同一の木で作られ、善興寺の方が根元で作られているので姉で、定福寺の方は妹だと言い伝えられているといえます。

満米上人は平安中期の僧で、地獄で地蔵が罪人を救済するさまをみて帰り、その姿を彫像に現したといわれます。その満米地蔵尊は、霊験地蔵でも特に信仰を集めました。

また、宮寄上の嶽山寺の境内別堂である岩野・地藏堂本尊の延命地蔵菩薩は、「田上の地蔵様と兄弟だ」

◀ 善興寺の地蔵菩薩像



◀ 岩野・地藏堂の地蔵菩薩



と言ひ伝えられていますから、ここにも同木の伝承がありました。

さらに新潟市東区沼垂の米満山法光院の一〇世菊地快剛が昭和三年（一九二八）に著わした『法光院由来』には、「本尊は羽生田定福寺と同木同作満米上人自彫の子安地蔵尊」とみえています。

同木ということではありませんが、下条字福島虚空蔵堂にあった虚空蔵菩薩坐像（現在は福島公民館安置）について、天保十三年（一八四二）の「下条西村社寺明細書上帳」では、「満米上人作と申伝ニ御座候」として

ています。この像は江戸時代前期の作ですから、満米上人の作というものではありませんが、明細書上帳が作られた時期、満米上人の名にあやからうとする考えが強かったことを物語っています。

加茂市付近で虚空蔵菩薩の同木伝



▲ 福島公民館の虚空蔵菩薩像と像底の墨書 貞享元年（1684）の制作年がみえる。

承をもう一つ挙げると、『越後・佐渡 ご利益さん』という本の五泉市別所の虚空蔵堂の部分に、  
（中略）行基が虚空蔵尊二体を刻み、天平四年四月十三日、当地に堂宇を建立、うち一体をここに安置したことに始まる。柳の木でできており、もう一体は柳津の菩薩だといわれている。  
と記されています。

八幡の西光寺に祀られている「日限り地蔵」は、福島県の会津若松市にあった同寺名の西光寺のものだったといえます。この「日限り地蔵」は平安時代に会津などで活躍した徳一の作だと言ひ、その霊験は近隣になり響いており、江戸の回向院で出

開帳がありました。その後、現在の東京都港区白金の松秀寺に移されました。明治九年（一八七六）三月、三体あった地蔵菩薩の一体が加茂の西光寺に、そしてもう一体は、茨城県稲敷郡阿見町の満徳寺に安置されることになりました。

会津若松の西光寺は廃寺になっていますが、地蔵堂は残って、木造の地蔵菩薩立像が安置されていますが、もともとあった地蔵菩薩との関係は不明です。

「三体あった」という地蔵尊が同木のものであったかどうかは曖昧ですが、その伝承については、もう少し調べてみる必要があります。



▲▲ 西光寺の日限り地蔵尊及び二童子像と港区・松秀寺の版画 童子の姿勢は同じである。



（考古・古代・中世部会 金子 達）

※ 註 版画は『港区文化財調査集録』第四集から転載しました。

# 猿毛の葬送

猿毛 志田辰平

猿毛の土葬は昭和四十九年（一九七四）まで続いた。上水道がない頃は水を沢からかけ流しで引いていたので、埋葬は最寄りの人家から百間離れていないとできない決まりがあった。俺も埋葬の手伝いに行ったが、誰か死ぬと村中総出で、家によって二人出のところもよくあった。そうでないと葬列を組めないから。

誰か亡くなると、「告げ」といって、誰々が亡くなったからいついつ出棺、と触れがまわる。気の利いた長老がいて、寄り集まると賄いを作る。翌日は一杯飯を炊く人と花籠を作る者に分かれる。高張提灯は葬儀屋が持ってきたな。

昔の墓は、手で起こせるような小さなものばかりだった。それで、穴を掘るときまず墓を起こし、かますを荒縄で立てる。そうして、「棺上一〇尺」というんだが、それくらい深く掘る。

墓場には見取図があつて、掘るにあたってはそれを参照するが、たまに骨にあたることがある。頭蓋骨とか。でも出棺の時間が決まっているから、別の場所へ掘り直す余裕がない。そこで、骨を地上へ引きあげて適当な場所へ弔う。家の墓地は範囲が決まっているから、一年に二人も三人も亡くなると困るわけだ。だか

ら水の通りが多いところは棺を松材で作るな、という決まりがあった。松は水に浸かると百年も持つから。行列は足袋裸足なんだが、場合によっては草履を履く。旦那様になると、「オイ草履」という高級な品が

イロのいろいろ 右から夏用・春秋用・冬用（志田辰平氏旧蔵、民俗資料館所蔵）



あるが、普通の人は藁草履。墓へ履いた草履は、縁起が悪いから墓所へ脱いで捨ててくる。だから帰りは、雨が降っていても足袋裸足。衣装は家ごとに「イロ」と呼ばれる袴があつて身につけた。

死者が出ると、枕だんごをこしらえる。大人は「もろうな、もろうな」というけれど、子どもはおもしろがってもらいたがる。葬列の一番先頭を「だんご売り」といって、墓所へ着く前にだんごを売る。仮に到着までに売れなかつたら、だんごは墓に飾られてカラスの餌になる。二番目は龍頭といつて道しるべ。三番目は花籠で、四番は茶碗とか箸とか金物とか、故人愛用の品を収めて担ぐ人。棺は、造りによっては玄関から出せない家がある。今は寝せ棺だが、あの当時は穴を掘らないとならなくて、面積が広いとたいへんだから縦に掘った。だから縦棺。時間がたつと身体が硬直して棺に納めにくくなるので、亡くなると程なく首と足などを縛つたものだ。

身についた者が手足を洗つたりして納棺（湯灌）することを「夜棺」といった。ひとたび納めてしまうと前後がわからなくなるから、棺には「前」と書いた。棺桶には釘を打ち、十文字に荒縄をかける。釘は石か何かで打ち金槌は使わない。使つた金槌が穢れるから。棺が大きすぎて玄関を通らない家は、茅で門を作り、廊下の戸を外し、左右に人が立って



葬列（山島新田の例、昭和二十九年頃）白装束は故人の近親者。竹の先には龍の細工を吊るした（山島新田 捧ヨネ氏所蔵）

“ここが玄関だよ”という意味を付与して外へ出した。

土葬の当時、自分の妻が亡くなると亭主は家に留守居して墓場まで見送ることができなかった。どういふわけなんかねえ。ある家のトトが、“俺破つてわーれけど行つてこ”と野辺送りしたのが例外か。主人は賄いの手伝いが“包丁はどこら”と聞いても、指図はするが勝手には入らない、禪宗だと大声出して引導を渡す。告別式を家のなかでするなんて、俺は四十九年以後に初めて知つた。

（昭和三年生、談）

# 大登峠 の利用者

大登峠の登り口は、長瀬神社八幡宮の裏手にあります。登り始めはきつい坂ですが、天ヶ坂まで登り切るとあとはなだらかになり、大境に着きます。ここまでは新発田領ですがその先は村松領となります。加茂から村松町へ行くには、ここを通ると三里で、黒水通りより随分近道となります。

大登峠は江戸時代に多人数の公用通行にも使われました。寛永十年(一六三三)幕府巡見使桑山一直、元禄八年(一六九五)村上藩主榊原政邦の参勤、天保十五年(一八四四)村松藩主堀直央の帰国、その他十数回に及ぶ遊行上人の通行がありました。参勤交代や公儀の大通行では、新発田藩から道橋普請が申し付けられ

ました。例えば明和九年(一七七二)幕府から朱印状をもらってくる遊行上人の通行には、新発田藩領の八組から七〇〇人の人足が動員されています(八幡 小池清彦氏所蔵「遊行 五三代尊如上人御巡国覚帳」)。

つぎに、庶民の側でよく利用した者に、見附に住み越後各地で俳句を指導した松岡茶山や、熊森(燕市)の医師で文人である竹山屯などがいます。茶山は同好の士との交際に、屯は加茂・村松・五泉・水原との往来に大登峠を頻繁に利用しました(「竹山日記」)。その外、加茂と村松を一日で往復する商人達もいました。もちろん、昼休みができる茶屋もありました。このように、大登峠が多く利用されたのは、大通行のたびに道路が手入れされ、加茂と村松の間が一日で楽に往来できる距離にあったからと思われる。

(近世部会 桑原 孝)

同十六日雨又陰夜晴 ○朝 佐兵衛中野立廻り二出ル、○午前二人二而中野出立、途中二而橋田忠右衛門二逢、夫より峠ノ茶屋ニ而午飯喫シ一飲致シ、夫より八幡西光寺へ寄加茂之次郎義綱公廟所へ参り、夫より夕方森田着、○夜専庵と中嶋楼へ登ル、妓三代、田中羅久貴、二袋師、翌早朝森田へ、専庵ト一集二帰ル

同十六日雨又陰夜晴 ○朝 佐兵衛中野立廻り二出ル、○午前二人二而中野出立、途中二而橋田忠右衛門二逢、夫より峠ノ茶屋ニ而午飯喫シ一飲致シ、夫より八幡西光寺へ寄加茂之次郎義綱公廟所へ参り、夫より夕方森田着、○夜専庵と中嶋楼へ登ル、妓三代、田中羅久貴、二袋師、翌早朝森田へ、専庵ト一集二帰ル

▲「竹山日記」にみる大登峠越え 嘉永4年(1851)10月分

# 五反田の 鮭

五反田村では信濃川を遡上する鮭の漁が行われ、新発田藩に初鮭を献上し、また川役を納めていました。近世後期の五反田村絵図には、「鮭ハンヤ(番屋)」が描かれています。



▲五反田村絵図にみる「鮭ハンヤ」画面中央から左に寄った河川敷で、鎮守・諏訪神社の堤外地に所在した(五反田 渡辺英子氏所蔵)

地理学者・小泉蒼軒は、鮭は越後の名産で、その漁をする地は多数あるが、「魚の多きは岩船郡三面川筋魚の美味なるは五反田辺なるを最大一となせり」と記しています(『三物新志』)。味の良さで五反田の鮭の評価が高かったことがわかります。貞享二年(一六八五)、新発田藩は信濃川沿いの二八か村に村高に依じて網敷を定め、五反田村と西酒屋村(新潟市)での鮭漁に助力するよう命じています。居繰網漁で一艘に二人がかかり、夜は篝火を焚きました。藩は五反田村で獲れた鮭を献上させました。塩鮭・干鮭・せわた(塩辛)・子籠(子持ち鮭)などが江戸の藩邸に送られ、幕府への献上、諸大名への進物に用いられました。

藩では例年八月に初川奉行を派遣して、その年初めて獲れた鮭を献上させました。明和六年(一七六九)の場合、八月三日に一番の初鮭、二十四日に二番鮭、二十五日三番鮭、二十八日に四番鮭と五番鮭が献上されています。一番から五番までの御用鮭が揃い、初川奉行が帰城した後、新発田町での鮭販売が許可されました。

(近世部会 池田 茂)